

カントウータ

Cantuta No.15

平成 22 年 11 月 1 日発行
(社)日本ボリビア協会

協会からのお知らせ

平成 22 年度総会決定事項

さる 8 月 2 日総会が開催されました、会員の皆様に結果の概要についてご報告いたします。なお、総会は現在会員数（維持会員及び個人会員含む）63名の半数を優に超す49名（内委任状33名）の会員の出席が得られました。定款の規定（委任状も含め会員の半数以上の出席者で成立）による会議成立の条件も満たしております。

議決事項

1. **決算** 21 年度（21 年 4 月 1 日～22 年 3 月 31 日）

前期繰越金 1,490,214 円
当期収入 572,824 円
当期支出 355,484 円
収支差額 217,340 円
次期繰越金 1,707,554 円

2. **予算** 22 年度（22 年 4 月 1 日～23 年 3 月 31 日）

前期繰越金 1,707,554 円
当期収入 1,000,000 円（全額会費）
当期支出 1,000,000 円

（内訳）
通信費及び管理費 100,000 円
ホームページ見直し 540,000 円
会報・交流会・文化イベント

260,000 円
予備費 100,000 円
収支差額 0 円
次期繰越金 1,707,554 円

3. **新役員人事**

（名誉職）

名誉会長 山下徳夫 再任
（元衆議院議員・官房長官・厚生大臣）
顧問 林屋永吉 新任
（元ボリビア・スペイン特命全権大使）
相談役 田中 茂 再任
（元和光市長・ボリビア国立サンアンドレス大学名誉教授）
相談役 渡邊英樹 新任
（西脇商事（有）代表取締役）
（役員）
理事 会長 白川光徳 再任
（元ボリビア特命全権大使・（財）海外日系人協会専務理事）
理事 副会長 大貫良夫 再任
（東京大学名誉教授）
理事 副会長兼会報担当 杉田房子 再任
（旅行作家）
理事 組織担当 小川秀樹 再任
（在大阪ボリビア名誉総領事）
理事 組織担当 嘉手苺義男 再任
（在沖縄ボリビア名誉総領事）
理事 情報担当 国本伊代 再任
（中央大学名誉教授）
理事 会報担当 細野豊 再任
（日本詩人クラブ理事長）
理事 情報担当 今村忠雄 再任
（日本海外協会会長）
理事 財務担当 長嶺為泰 再任
（WUB東京名誉会長）
理事 広報担当 細萱恵子 新任
（国際航業（株））
理事 関係団体担当 遅野井茂雄 新任
（筑波大学大学院教授）
理事 組織担当 宮田次郎 新任
（住友商事（株）理事資源第一本部副本部長）
理事 総務担当 杉浦篤 新任

(元 トヨタ自動車(株)勤務)
監事 金木克公 再任
(元 JICA 勤務)
監事 永井和夫 新任
(株)三祐コンサルタンツ 技術本部 顧問
事務局長 金田正敏 新任
(元(株)東芝勤務)

上記の通り、理事、監事、事務局長が再任あるいは新任として選出されました。新任の理事として遅野井茂雄氏、杉浦篤氏、細萱恵子氏及び新しく維持会員として入会された住友商事から宮田次郎氏、また監事に永井和夫氏が就任しました。

そして白石健次氏、佐々木仁氏がそれぞれ理事、監事を退任されました。また前会長林屋永吉氏は顧問、前専務理事の渡邊英樹氏は相談役に就任されました。そして新理事の互選で会長に白川光徳氏、副会長に大貫良夫氏、杉田房子氏が選出されました。なお、専務理事は当面、置かないこととし、新しく設けられた事務局長として金田正敏氏が就任しました。

4. 22 年度活動方針

重点項目として下記3点が承認されました。これを踏まえ、理事会を中心に適宜作業グループを設ける等により、方針の具体化更に実施を進めたいと思っています。

重点項目

- (1)財政基盤の強化・充実
- (2)協会のホームページの更新・会報の発行及び充実

現在、ホームページのレイアウトの一部見直し、並びに掲載内容の定期的更新および会員への情報提供の可能性を含む新しい運営管理体制について鋭意検討中で、可能なものから実施していきたいと考えています。また協会の会報「カントウータ」も編集担当を決め、定期的な発行と更なる充実を図っていきます。

- (3)在日ポリビア人の団体、及びポリビアの日系ポリビア人の団体との交流

今後とも会員皆様方のご支援、ご協力をお願い申し上げます。

新役員の挨拶

会長 白川光徳

かねて辞意を表明されていた林屋会長が、モラレス大統領の日本公式訪問具体化を契機に、大統領は新体制で迎えるべしとのご判断で会長職を辞任されたのを受け、更に8月の総会を経て、会長職をお引き受けすることになりました。総会では、何人かの新しい方に理事、監事として参加していただくことになりました。これら役員皆様とともに、カントウータ誌の発行など実績と評価のある事業を継続進展させるほか、ホームページを改善・活性化させ、更にインターネットを通じた会員への情報提供サービスができないかと考えております。伝統的な鉱物資源の他、電気自動車に不可欠なリチウム資源の世界最大の保有国として、あるいは魅力的な観光資源を持つ国として、最近、ポリビアへの関心の高まりが見られる中で、ポリビア事情の紹介等を通じて、日ポの友好促進に、ささやかなりとも寄与したいと願っております。そのためにも、より多くの、色々な方に仲間として参加していただけるようにしていきたいと思いません。よろしくお願い申し上げます。

組織担当 宮田次郎

弊社、住友商事は1970年代からポリビアに事務所を開設し、又業務協力者を置き、ビジネスの可能性を探っておりました。2007年には、サンクリストバル亜鉛、鉛、銀鉱山に参画し、2009年4月からは、同鉱山の100%の権益を取得し、ポリビアとの関係を深めております。

私自身、メキシコシティ、サンチャゴと駐在した後、2年前までは、弊社内の南米支配人としてサンパウロに駐在していたことから、南米との関係は深く、南米に対しては、特別な思いを抱いております。サンパウロ駐在から帰国後は、サンクリストバル鉱山関係、三菱商事/JOGMEC とフォローするリチウムビジネス関連で、ポリビアを訪問する機会が増えましたが、昔、初めてラパスを訪問した際に、所謂アンデスの原景に出会ったようで、本当に感激しましたが、その景色は変わらず美しく、南米の中では珍しく治安も良く、全てが素朴なこの

国が、今後、大きく発展することを祈っております。

関係団体担当 遅野井茂雄
初めてラパスを訪れたのは1984年でした。5桁を越す凄まじいインフレの嵐が吹き荒れ、紙幣を刷る資金にも事欠く財政破綻の中で、民主化の行方にも暗雲が立ち込めていました。UMSA（国立サンアンドレス大学）と道を隔てたホテルに逗留し、ひどい頭痛に襲われながらも垣間見た現代史の激しい一面に夢中にさせられたものです。あれから四半世紀年以上が過ぎ、ボリビアは私の予想をはるかに超えた展開を見せてきました。一つは、その翌年の新経済政策があれほどうまくいくとは思っていなかったこと、二つ目は2000年以降のボリビアの動向の中でそのような形で先住民や社会勢力が政権の中樞を占めるに至ったことです。これからもボリビアは、さらに予想を超えて動くことでしょうか、コロンブス以前との対話を宿命づけられ、その中のさまざまな時空、文化、民族を包含する新たな統治構造の創出に取り組み続けるこの国の行く末を見守っていきたいと思います。

総務担当 杉浦 篤
1937年7月生まれ 丑歳 蟹座 大阪府出身です。ボリビアは未訪問ですが、トヨタ自動車に勤めていた若い頃、売掛債権の回収でボリビアをはじめ中南米各国の人達と接触経験があり、ラパス、アリカ、イキケなどの地名は今でも記憶しています。その縁で少し習ったスペイン語に再挑戦して見ようかと思っています。昨年来、自動車・家電などのエネルギー源として蓄電池が大きくクローズアップされ、軽量・高出力化に最適なりチウムがレアメタル資源として注目を集めていることをキッカケに自動車業界OBとして、現在世界一の潜在埋蔵量を持つボリビアに関心を抱きました。一方でボリビアは他にも豊かな天然資源がありながら、南米の最貧国に甘んじており遠く祖先を辿れば日本人とルーツを同じくするモンゴロイド系の先住民が多いこの国に親しみが沸き、日ボ両国の民間交流・親善の支援をしたいとの思いから、ご縁あって協

会の一員に加えて頂きました。他の役員や会員の皆様と力を合わせて日ボ両国関係の発展を目指して微力を尽くしたいと念願しています。何卒宜しくお願い申し上げます。

監事 永井和夫
本年新たに監事を仰せつかりました永井和夫と申します。国際協力機構（JICA）の前身、海外移住事業団に入り、当初は海外移住、その後国際協力業務に従事し、2006年（平成18年）に退職するまでの間、ブラジル、パラグアイそしてボリビアに計15年勤務し、南米バカをもって任じております。ボリビアには2000年から4年間、JICA事務所長としてラパス生活を楽しましました。高山病を克服すると、その多様な自然と奥深い文化の虜になり、今でも虜のままです。ボリビアとの関係で忘れてならない日本人移住者の存在。オキナワ、サンファンの大移住地はもちろんですが、ラパス、ベニそしてパンド県で戦前から活躍する日系人の方々も、日本とボリビアの友好関係を築いた重要な存在だと知らされました。日系の方々とのつながりを大事にしながら、日本ボリビア友好の発展に、微力ながら、何かお役に立てればと考えています。

事務局長 金田正敏
前専務理事渡邊英樹氏の後任とした事務局長に就任いたしました。私は今までボリビアとの関わりは全然ありませんでした。前駐日ボリビア大使のアシミネ（安次嶺）氏と知り合いになり、日本ボリビア協会の会員になるようお願いされ入会させていただきました。その後大使は昨年5月に本国に帰任されてしまいましたので協会のことは一切わからない状態でした。その後、8月の総会時渡邊氏から専務理事を退任したいとの意向が表明され理事の皆様方の推薦で事務局長に本年1月就任しました。今後は本年の活動方針を確実に実行するとともに、財政基盤の強化を図っていきたくと思っています。皆様方のご支援、ご協力を頂くことも多くなると思いますが宜しくお願い申し上げます。

ボリビア国前下院議員 = ミチアキ・ナガタ二氏との懇談会

9月6日、韓国訪問からの帰途、日本に立ち寄られた前国会議員（下院外交委員長）のナガタ二氏（日系2世）との懇談会を設け、最近のボリビア事情を伺いました。要点を次の通りご紹介します。なお、この懇談会は、協会会員の福盛さん（ナガタ二氏とは従兄弟）の斡旋で実現しました。今後このような会合を企画したいと思います。

日時 平成 22 年 9 月 6 日（月）
PM13:00-16:00
場所 工学院大学 28F 校友会談話室

ナガタ二氏の経歴

1960 年生 ボリビア国サンファン出身の二世、コロンビアの大学で国際関係論を学び 1988 年政治学の修士号を取得。またボリビア下院議員として外交委員長を歴任、2009 年 12 月に議員を退任し現在は貿易業を営んでいる。

訪日の目的

韓国訪問の帰途日本の農業機械メーカーとの打ち合わせ。また韓国からも耕運機及び農業用作業機の輸入を検討中。

ボリビア大統領韓国訪問

韓国の招待でモラレス大統領が 8 月 25 日から 27 日訪韓、韓国大統領主催のボリビア大統領歓迎宴にナガタ二氏も出席。ナガタ二氏は大統領訪韓前に韓国で開かれた韓国国際協力事業団(KOICA)のリーダー育成研修に、ボリビア国会議員 10 名、市会議員 3 名と参加した。

韓国企業の急速なボリビア進出

韓国の資源確保の国家戦略の下に官民一体での取り組みは凄まじい、大統領訪韓時には李明博大統領など政府関係者と有力企業の代表者が歓迎宴に参加して、ボリビア訪問団と交流を行った。今後ボリビア他、南米諸国で韓国企業の活躍が期待されます。

ボリビアの資源国有化策

表向きは国有化といわれているが、実態は以前の政権が公社を民営化した際締結した不平等な国有財産転売契約の変更措置である。現在対象になった外資系企業は撤退していないし、今もブラジルの石油会社は継続して投資をしている。天然資源の開発については 51%の株式を国が保有することになっているがその根拠となる法律は存在しない。そのため外国からの投資安全性を規定する法律の策定を作業中。一方、ボリビアは資源などを開発する技術と資金はないのでそれらを外国から導入する必要性は政府も認めている。ボリビアは石油・天然ガス以外に資源として錫・亜鉛・地熱・風力等がある。

リチウム資源争奪戦

アジアから日本・韓国・中国、欧州はフランス・ロシア、南米はブラジル・ベネズエラが積極的である。モラレス大統領の訪韓時、技術開発協力の M/U を調印されたがリチウム開発の権利については未だ決定されていない。2～3ヶ国が共同で開発するのがよいのではないか。

日本についてのボリビアの見方と期待

ボリビアは今後、鉄道・道路・空港などのインフラ整備を目指していく。日本のインフラ技術（道路・橋・鉄道・空港・電力・通信・上下水道など）に大いに期待している。またボリビアは農業立地に優れていることをアメリカの研究者が注目している。ボリビアでは日系移民が米作・小麦・養鶏など農業技術を導入して地域発展に貢献している。但し農産物・鉱物輸出のネックとなるのは、チリの港のイキケ、アリカまでの輸送ロジスティックの問題である。

農産物の日本向け輸出

ボリビアは有機栽培がブームとなっている、日本にはゴマ、キヌアや豆類を輸出。またコーヒーやカカオも数量は少ないが輸出している。

日本方式地上デジタル放送導入

ボリビアが地上デジタル放送に日本方式を導入すると正式発表されたが、日本方式を導入することを決めたのは日本の技術の信頼性及び技術援助である。ボリビア側は外務大臣、公共事業大臣がバックアップしたのとブラジルを始め南米諸国が日本方式を導入したのも影響している。

モラレス政権の現状

モラレス大統領は反対勢力に対し圧力をかけ、国会で野党は活躍の勢力を失い、大統領を指示しない市民団体の指導者は国外に逃亡したのもいる。大統領の最大の抵抗勢力は今や野党勢力ではなく元与党 MAS (社会主義運動党) を構成する勢力の一部と分離した原住民団体である。大統領の支持率は当初 65% あったが現在は 45% 程度。野党側の最有力のライバルはラパス前市長、他に元教育大臣。

チリとボリビアの関係

現在チリとボリビアはモラレス政権になって 13 項目について交渉中で、ボリビアは内陸国で太平洋側からの出口 (アリカ、イキケ港) はボリビアの発展のために重要である。

ボリビアの現況

1. 外貨収入は 1 位は石油と天然ガスの輸出、2 位は海外への出稼ぎ労働者からの送金で外貨収入の 30% ある。アルゼンチン・スペイン・イタリア・イギリス・アメリカ・日本に出稼ぎに行っている。彼らはボリビアでの就職難や賃金の問題また子供の教育の問題などで一旦海外に出ると帰国しないケースが多い。
2. ボリビアは現在労働力不足である、特に自動車修理工・建機・重機のオペレーター、左官工などの技能労働者が不足。理由は南米各国やスペインなど欧州諸国の方が収入がよく出稼ぎに行ってしまうからである。
3. 最近、特に中国、韓国の進出が著しい。日本は現在、住友商事がボリビア最大の鉱山に投資されているのみで、これからボリビアを益々理解して頂き、良きパー

トナーとして日本企業の進出を期待している。

ボリビアの近況

この情報はボリビアのサンファン協会から毎月送られてくる会報、A B J 通信より抜粋しました。

ボリビアで地震が起きたら？

ボリビアでは地震災害は殆ど無いという先入観があるが、地震がまったくないとは言いきれず、いつ地震が発生しても不思議ではない。強い地震が発生すれば現在の建築物であればその殆どが倒壊すると予測され、地震被害は大きいなものになる。ボリビアで記憶に新しい地震発生は 12 年前の 1998 年 5 月 22 日早朝、コチャバンバ県南部のアイキレ、トトラ、ミスケ地方での地震で死者百数十人、負傷者数百人の犠牲者が出てボリビアでは大きな災害となった。ボリビアでは 1913 年から地震観測が始められているが、San Carixto 観測所の研究員によるとそれ以前の地震のデータはないとのこと。ボリビアではコチャバンバ、タリハ、スクレ、ラパス北部、ポトシの各県は地震が多いとされている。サンタクルス市でも 1845 年の地震で多くのアドベ建築の住居が倒壊している。ハイチやチリで発生した大規模な地震がボリビアの主要都市で発生すれば建造物の倒壊や多くの死傷者を出すことになる。

ボリビアに電車を導入？

ブラジルからボリビアのタンボケマードを通過し、チリまでの鉄道線路の建設計画に、ブラジルが特に関心を持ち、推進に意欲的であるが、100 億ドル以上を要する計画であり、ブラジル、インド、中国などからの資金を調達することで話が進められている。ボリビア国内での鉄道事情は極めて遅れており、国内を、さらにはアンデス山脈を越える鉄道が完成すれば交通事情もずいぶん変化する。問題は資金調達で、構想だけで終わらせないように頑張ってもらいたいものだ。

発電所3カ所などを国有化する

モラレス大統領は3ヶ所の発電所、送電会社1社を国有化した。国有化した発電所はコチャバンバ県のCorani発電所とHermoso発電所、サンタクルス県のGauracachi発電所の3ヶ所である。同時にコチャバンバ県にある送電会社も国有化された。政府は国有化したことによって電気料金を大幅に下げたことを約束した。今回の国有化も政治的なショーであり株の強引な買い占め行為に等しいとの見方が強い。電力不足になることだけは避けてもらいたい。

ボリビアも日本方式地上デジタル放送

日本の総務省は7月5日、南米ボリビアが地上デジタル放送の規格として日本方式の採用を決めたと発表した。日本方式の採用は、中南米各国やフリッピンに続き10ヶ国目。電波障害に強いなど、技術的な優位性が評価された。総務省は東南アジアやアフリカ南部諸国にも採用を働き掛ける。

異常な寒さが南米で猛威死者など各地で被害

南米大陸南部がこのところ強い寒気に覆われ、各国で死者が出るなど被害が拡大している。ペルーの国営通信によると、ボリビアでは低温の影響でこれまでに18人が死亡している。ボリビア当局は7月19日、主要都市サンタクルス・デ・ラ・シエラの気温が3度となり、29年ぶりの低温を記録したと伝えた。他の地域では零下に達したところもあるという。パラグアイでは低体温症で8人が死亡、ウルグアイでも寒さにより2人が死亡したと地元のメディアが伝えている。ペルーでは、気象当局が3年ぶりの低温を記録したと発表したと伝えられており、アンデス山脈の都市アレクイパでは気温がマイナス17度に達した。地元メディアによると、幼齢のアルパカが死ぬなど、この地域に4万頭いるアルパカの約10%が被害にあっている。

じゃがいもの旅の物語

インカからジパングまで 1

5

杉田房子
旅行作家

その港町を、インカの男女は船上から不思議そうに眺めた。波止場で働いている男たちが、シャツとズボンを着たスペイン人と同じような姿なのに、肌色も顔色も顔立ちも自分たちと似ている。見ていた船乗りが笑った。

「同じインディオというのは無理かな。それにしても数がめっきり減ったぜ」

コロンブスが往来しはじめた頃、全島に30万人近く住んでいると報告したインディオは、1万人そこそこに減っていた。

1514年の記録には1万4千人と記されている。押し寄せたスペイン人が目の色を変えた黄金採取に酷使されて、次々と死んでいった結果だった。

大西洋を越えてスペインに運ばれた金銀は、1503年を基準にすると1509年には7倍、1512年には11倍、1518年には15倍にも及ぶ。1538年に125倍、1557年に440倍と飛躍するのは、メキシコとインカを征服したからでカリブ海の島々の金銀は1530年代にはもう底をつきかけていた。

その倍数が、使い殺されるインディオの倍数になった。1514年、酷使に反抗したヒスパニオラの酋長アトウェイは、見せしめのため火焙りの刑に処せられたが、これでスペイン人にあわなくてすむ、といいながら火刑柱に縛りつけられた。しかし、スペイン人にあわなくてもすむ時がきてもそれでインディオの悲惨は終わったわけではない。スペインが新世界から得る富は、当然のことながらヨーロッパ各国を刺激して、スペイン艦隊がわが物顔に往来した海と島には、やがて各国が争って進出するようになる。スペイン人は追い払われていなくなっても、イギリス人が、フランス人がオランダ人が、そしてドイツ人までもが支配者として代わって登場した。最初から支

配が目的で進出したのだから、原住民は踏みじられたばかりに押さえつけられた。

コロンブスが第三次航海の1498年に船を寄せたグレネイダ島は、その後、フランスに、さらにイギリスに支配される変転を見るが、フランス人に押さえつけられ、反抗すれば殺伐されたこの島のインディオは、最後に残った一群が逃げ場を失い、全員が崖から投身自殺してしまった。いま「ル・モルン・デーソテュール(投身の丘)」とフランス語で呼ばれる丘と崖は、その現場なのである。

インカの男女が不思議そうに見たインディオを、船乗りが「同じインディオというのは無理」といったのは大間違いだった。ヒスパニオラでもインカでも、土地はもちろん生命さえ、インディオはどこでも同じように洗ざらいスペイン人に持っていかれていたのだった。

臆病で、好戦的でないし、知性もある。いい召使や使用人になれるだろう - と初めてであった時のインディオの印象を、コロンブスが航海日誌に記したのは1492年10月12日から15日にかけての短い間のことである。そのインディオからかき集めたじゃがいもやサツマイモで食べつけたからこそ、スペインへ戻ることができたのだし、新世界発見の英雄にもなれたのだが、翌93年にはじまる第二次航海では、食物の礼をするどころか使用人扱いに徹底し、1つの集落が3カ月ごとに金の二分の一オンスないし三分の二オンス納めるよう働くことを強制した。

インディオにしてみれば、なにがなんだかわからなかったに違いない。金もくれてやった。食物もかき集めてやった。大喜びで東の海へ帰っていったのに、次に現れた時はただもう居丈高にこき使おうとする。

臆病で、好戦的でないとコロンブスが見たインディオも、さすがに怒った。裸で、武器といえば弓と矢ぐらいしかないのに、同じ弓でもバネ仕掛けの大きくて強力な指を使い、矢の代わりに銃と大砲まで撃つスペイン人に立ち向かったのである。コロンブスは第二次航海を1496年に切り上げるが、その前年にはインディオを公然と交戦状態に入っていることを、航海日誌に記

している。

知性もある、とコロンブスも認めたインディオは、勝敗を初めからわかっていたはずだが、それでも戦うほどスペイン人に追いつめられていたことになる。敗れたインディオは山奥に逃げたが、それを追跡し、駆り立てたのはスペイン人が連れてきた犬だった。アンデス山地のインカは、スペイン人がくるまで馬を知らなかったものの、ラマやアルパカの家畜は飼っていた。ところが、カリブ海の島々には家畜はまったくいなかった。そこに、人のいうがままに動き、命令に従う犬という家畜がやってきてしかも歯をむきだして襲いかかれたインディオの恐怖。

1498年の第三次航海で、600人ものインディオをコロンブスがスペインに連れ帰ったのは、もはやそれほど無抵抗になっていたことを物語っていたのだった。

実際、農耕仕事もいい加減にしかやろうとしない者が増えていた。バタタのじゃがいもにしるバタタのサツマイモにしる、自然に成るものだけではなかった。それだけなら、コロンブスが第一回目の帰航で食べつなげるだけの食物を集められなかっただろう。じゃがいもやサツマイモはもちろんトウモロコシやキャッサバ、バナナやパイナップルのほかに煙草や棉まで栽培していた。インカのインディオが、パパスのじゃがいもからトマトにナスまで、畑で作っていたのと同じだった。

もっとも、インカと違って木や金属の細工をあまり知らなかったカリブ海の島々のインディオは、農機具といっても石器を主として、それに手頃の枝木を結びつけるぐらいがせいぜいだし、収穫もたかがしれていた。アンデス山地と違って赤道直下の島々では成熟が早いし、何回も収穫できたから、それで十分だったのである。それに、海には魚や貝が無限にあった。

(次号へつづく)

Email: kaneda@nipponbolivia.org

新規会員の紹介

平成 22 年 4 月 1 日以降下記の方々が新規に入会されましたので紹介させていただきます。

維持会員

住友商事株式会社
学校法人 阪神学園
オリオンビール株式会社
特定非営利活動法人 日本ボリビア医療友好協会

個人会員

杉浦 篤 (新理事)
福盛 拓志 ((株)フネスアルキテクトス 代表取締役 一級建築士事務所)
尾山 信一 (北三(株)代表取締役社長)
山内 順一 ((株)クランニー テクノロジー 代表取締役 オリンパス顧問)
畑 幸輝 (ウイストロン(株) 営業マーケティング事業部 部長)
永井 和夫 (新監事)
遅野井茂雄 (新理事)
檜原 ふゆ (小学校教員)
仲田紀美子
渡辺 徹
中村 美恵
萩生 光紀
土橋 洋

渡辺新大使ボリビア国に赴任

9 月 29 日渡辺利夫大使ボリビアへ赴任
10 月 12 日 信任状交付
今後の日本とボリビアとの友好関係の促進及びボリビアの発展に貢献される事を期待いたします。

事務所移転のお知らせ

日本ボリビア協会の事務所が 4 月 7 日に下記に移転しましたのでお知らせいたします。
住所 〒222-0003 横浜市港北区大曽根 2-7-9
TEL 045-543-7850
FAX 045-545-0912 (受信のみ)

訃報

下記会員の方がお亡くなりになりました、謹んで哀悼の意を表します。

鶴見弘喜氏	1 月 1 0 日 享年 7 1 歳
横山千秋氏	1 0 月 6 日 享年 7 6 歳

編集後記

杉田房子

カントウータ 15 号をお届けします。本年度当協会の総会・理事会は 2010 年 8 月 2 日開催され、新役員メンバーが発表されました。新しいメンバーが加わり組織は強化されましたので力強く前進です。会長は永年お力添え下さった林屋永吉氏から元ボリビア大使の白川光徳氏に代わり両氏ともボリビア大使としてボリビアの現地事情に詳しい経験豊富な方で、幅広い人脈をお持ちです。新メンバーは強力な人物がそろい、これからさらなる発展が楽しみです。皆様ご多用の方ばかりですが、当協会にお力添えをいただき、さらに魅力的な協会にさせていただけるよう心からお願い申し上げます。そして、会員の輪がひろがりますよう、お友達、お仲間を当協会の会員になっていただけますようお声がけをお願い申し上げます。

(編集委員)

杉田房子 細野 豊 金木克公
細萱恵子 金田正敏